

井原 一成

東邦大学医学部 講師

## 介護老人福祉施設における盗られ妄想の介護方法の開発

個室型と従来型の2つの介護老人福祉施設で物盗られ妄想の発生状況の把握、従来型施設で行われているケースレビューにあがったケースとあがらなかったケースの比較、両ホームで物盗られ妄想を有する高齢者のケアを担当する職員へのインタビュー調査を行い、二つの施設における物盗られ妄想の発現と支援方法の異同を明らかにし、物盗られ妄想への支援方法の開発を行った。

2施設で物盗られ妄想の発現に差はなかった。物盗られ妄想は、軽度から中等度の認知症を伴い、多くは年単位で継続していた。

物盗られ妄想の対象が、職員や他の入所者に向かう事例が認められ、妄想の対象が職員や入所者といった施設内の特定個人に向かったり、妄想の訴えの頻度が高い場合に、介護の負担感が高くなっていた。

両施設で共通する支援方法は、「盗られた」という当事者の主観的事実に合わせた対応と、利用者の能力を活用した支援であり、その中心に当事者への共感があった。具体的には、盗られた物を一緒に探すことが最もポピュラーな支援方法であった。また、異なる支援方法としては、盗られた物が見つかった場合、従来型の施設では柔らかく事実を伝えているのに対し、個室型では説得・説明が行われていた。この両施設間の支援方法の差は、物盗られ妄想に対する態度の差であり、物盗られ妄想の捉え方の差であると考えられた。従来型では、物盗られ妄想の症状は、認知症、精神疾患、性格の単独要因とともに生活歴を含めた複数の要因の相互作用として捉える考え方が優位であったが、個室型ではやや単独要因で捉える傾向が見られた。

これらの研究経過を踏まえて、最後に個室型と従来型の両施設で利用可能な支援方法の提言を行った。物盗られ妄想への支援には、職員がこの妄想を疾病として理解することと、その疾病を負った高齢者に対する共感と理解との両者が重要であることを強調した。